

謝辞

御領謙先生とお会いしたのは、2002年8月29日の暑い日であった。初対面にもかかわらず、真摯に私の研究内容を聞いてくださった。その後2ヶ月間という短期間で予備審査用論文を書き上げることができたのも、先生的確な御指示のお陰である。審査委員会の上村保子、市川薫、宮埜寿夫、伝康晴の各先生にも謹んで感謝を申し上げる。

本博士論文の元となった既公表論文は、吐師道子、Bobbie Beckman、長塚紀子、高橋真知子、三田地真美各氏の長年に渡るご協力の賜物である。

故福迫陽子先生は、談話と固有名詞の論文を書くよう最初に励ましてくれた。Cortex編集長Ennio De Renzi先生には意味記憶の英論文を三度にわたって校正していただいた。Aphasiology編集長Chris Code先生は、無名の私に固有名詞のReviewを書くよう薦めてくれた。加藤元一郎先生からは勉強会などを通じて多くの示唆を受けた。本論文の執筆時には梅本和正、三橋乃理子、藪貴代美、櫻井正人、岩本明子氏にお世話になった。

下記の方々には、既公表論文執筆の際、データの提供や御助言を受けた。堤文生、河村満、池田学、長谷川啓子、宮森孝史、小野美栄、渡辺攻、中村哲雄、尾崎万理、石田理恵、金子真人、苧阪満里子、山下光、西条一彦、和田弘子、土屋浩子、中西之信、鈴木淳、鈴木弘二、井関雅雄、鶴田薫、朴梨香、加藤千香子、湯村義雄、町中信義、萱原裕子、苧安誠、藤田郁代、三好純太、倉持裕子、村西幸代、三好裕子、鈴木範子、山本弘美、三島淑江、平井久美子、河原井誠一、石川保子、伊橋敦子、市丸洋子、李英愛、三浦康子、土橋三枝子、坂井道子、加藤恭子、三村将、Katharine Odell、宇野彰、小嶋知幸、今泉利江子、加藤敦子、山本晴美、杉原康義、小林利弘、小林亮子、高橋順子、田中充枝、田上美年子、山本栄子、菅原栄子、森田浩、石塚君予、岡憲一、財津淑子、上司郁夫、坪井義夫、下江豊、毛束真

知子、戸来和雄、神作暁美、広瀬明美、辰巳格、小沢義典、依田美都、恩田理華、藤牧聡子、NHK放送文化研究所。

千葉労災病院の石田静江、内村元、峰島智子氏をはじめリハ科職員の皆様、健常披検者として参加いただいた当院事務局などの職員、看護学校の学生、白子作業所の皆様にお礼を申し上げたい。本論文の研究の多くは、労働福祉事業団のリハプロジェクト研究およびリハ共同研究からの研究費によった。労災病院に勤務できたことは幸運であった。

各種の検査に協力していただいた数多くの患者様、ご家族に深く感謝する。私の研究は言語という、人間の尊厳にかかわる機能の障害を持つにいたった患者様の上に成り立っている。その不幸にもかかわらず、多くの方がすすんで検査に応じてくださった。その結果、ほとんど見逃されてきた談話と固有名詞が、制限つきながらも良く残されていることを見出すことができた。患者様に多少の恩返しができるのではないかと考えている。

私事であるが、無き父母にも感謝したい。身体障害や貧困にも決して愚痴をこぼさなかった。私がリハビリ界に進んだのも今にして思えば両親の影響であろう。結婚前から支えてくれた妻和代にも感謝する。

私は中学卒業後社会に出て、働きながら夜間の高校と大学を出た者である。そのため、若いころは学歴と勉強時間にあまり恵まれなかった。しかし、千葉労災病院に就職してからは、夜間や休日に思うままに勉強できた。その結果、夢想だにしなかった博士号を得ることができた。

現在、世界には貧困や障害などによって勉強の機会が与えられず、なすべも無く過ごしている多くの子供、若者がいる。私の若い頃に比べると、その数はむしろ増している印象すらある。希望するものには勉強の機会が保障され、同時に学歴や博士号の有無に関わり無く、その人物の能力と努力が認められるような社会になることを切に望んでいる。